

論文

レオナルド・フジタ「平和の聖母礼拝堂」と中世美術 —聖母崇敬とその表象についての一考察—

吉岡 泰子*

はじめに

本研究は、レオナルド・フジタ（1886-1968）がフランス、シャンパーニュ地方のランスに最晩年に建立した「平和の聖母礼拝堂」（1966年）を対象とする。ネオ・ロマネスク様式の建築¹については既に先行研究があるものの、内部装飾について、中世宗教美術との関連において言及されたことはまれであった。本論文では、フジタが敬愛するルネサンス期の巨匠ばかりでなく、中世美術の影響が内部装飾に見られることを、フジタの旧蔵書やその足跡から明らかにしたい。

具体的には、1959年、73歳にしてカトリック教徒となったフジタの聖母崇敬がどのように、聖母に捧げる「平和の聖母礼拝堂」の建設に結び付いたのか、その経緯を詳らかにしつつ、礼拝堂内の祭壇に描かれた二つの聖母子について、図像学の観点から、中世宗教美術の影響を吟味する。

フジタが描いた宗教画の図像を分析する際、図像の比較にとどまらず、「藤田嗣治資料」（東京藝術大学大学美術館収蔵）を用いて、フジタの日記や彼が収集した図像資料、「藤田嗣治旧蔵書」（東京国立近代美術館本館アートライブラリ収蔵）を参照して、フジタに影響を与えた可能性のある図像の特定に努めた。

さて、フジタの、聖母マリアとの最初の遭遇は、いつ、どこでであったのだろう。三つの先行研究がそれを示唆する。藤田研究の第一人者、林洋子は、「1903年頃、中学4年生であったフジタは「聖マリア会」が主催する暁星学校の夜学にフランス語を学びに通い始めたが、そこの教師たちはフランス出身の聖マリア会宣教師であった。」²と述べている。また、ピエール・ラドエは、「かれは、そこの小さな聖堂へ宗教画を見に行くのが好きであった（後略）。」³さらに、アンヌ・ル・ディベルティは、「フジタが最初に通った教会は東京の通学途上にあった。彼はまだ14歳だったが、しばし

* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程後期3年

ば中に入り、座って聖母や聖人たちの像を見つめていた。」⁴と記している。元来はキリスト教徒ではなかったフジタだが、4歳にして母と死別し、また、14歳にして西欧美術の習得を目指し渡仏を夢見ていたフジタに、この時期、聖母への憧れが芽生えたとはいえないだろうか。

一般的に、キリスト教における聖母への崇敬は、公式にはエフェソス公会議⁵に遡るが、それ以前から存在したとされる。新約聖書中の記載は少ないものの、2世紀半ばに書かれたという外典『ヤコブ原福音書』や、『偽マタイ福音書』、『黄金伝説』によって、マリア伝はいつそう充実し、さまざまなマリア像が形成されていった⁶。

そして、最後の審判における、主キリスト、神への執り成しを仲介する聖母マリアへの崇敬は、中世初期以来活況を帯び、特にカトリック教会の中では聖人崇敬の別格的存在として、貴賤を問わず様々な救済を祈願する対象となっていくた。中世後半期の西欧では、長びく十字軍の遠征、封建制の崩壊、ペストなど疫病のまん延、宗教戦争が人心をおびやかす中で、神秘主義の宗教家や支配層の熱い支持により、芸術家たちによる聖母表象の多様性と量は、キリストを凌ぐようになった。聖母にささげるノートルダム聖堂は数知れない。近世以降は、カトリックの海外布教を通して聖母崇敬は世界に広がり、各地の女性神と習合して伝道拡大に寄与したのは、周知の事であろう。近・現代にあっても、若く美しい聖母マリアへの愛好は洋の東西を問わず衰えることがなく、今日に至っているといえる。

この様な聖母マリア崇敬の歴史を踏まえつつ、フジタの聖母崇敬とその表象について考察を進める。

第1章 礼拝堂建立に至る道【別添資料：年表参照】

1913年に初めて渡仏したフジタは、南仏やブルターニュ地方の教会堂を訪れ宗教美術に触れて、自らもナイーブで個性的な聖母子を多く描いた。第一次大戦後、1920年代後半のエコール・ド・パリ時代以降しばらく宗教画から距離をおくが、1930年代は中南米を、1950年代はヨーロッパや北アフリカ各地を訪問する中で、ロマネスクやゴシック、バロック様式の聖堂はじめ多くのキリスト教美術、カトリックの宗教儀式や聖母、聖母子表象にふれてきたと考えられる⁷。

第1節 宗教的体験

太平洋戦争終結後の1949年に、日本画壇への失望から逃れるように日本を去り、1950年、念願のフランスに再入国を果たしたフジタは、1955年にフランス国籍を取得した。そして、1959年の受洗に至る間に、多くの古い教会堂を訪問している⁸。その中で、聖母崇敬にかかわる宗教的な体験をしたことが分かった。以下に日記から抜粋する。〔 〕は、筆者の補足である。

フランス西部の古寺巡礼 1957. 8. 13-19⁹

8月14日 Eshe-Bordeaue-Moissac

ボルドー-musee [ママ] で、1929年の《二人女》の手直しして、(ドラクロア、ボッシュ、ブルゲルも見学) 夕方6h Moissac 着 すぐ夕食前寺に行く。素晴らしい十二使徒(書記)の彫刻入口 裏手のクロアートルの廊下見物【中略】

夜アベマリアの行列 山のマリア様光る処からろーそくのプロセション行列降りて来て君代涙出す 清らかな [な] 事【後略】

これは日付から言って、聖母被昇天の祝日(8月15日)の儀式に出会い、感銘を受けたのであろう。

晩年の友人、ロマネスク美術への造詣の深かった画家の田淵安一¹⁰は、フジタのキリスト教の帰依について、後年、以下のように述べている。「カトリックに改宗されたというのは、僕の考えでは、カトリックの儀式の美的なところにとっても惹かれた。

【中略】宗教美術から入られた。美的なものや宗教的なものが一致することはありますよね。宗教美術を通して、目から、カトリックに入っていくということはよくわかります¹¹。」このようにカトリックの宗教儀式や荘厳な聖堂に魅かれていくというのは、田淵の発言のように芸術家としてのみならず、個人的心情としても、太平洋戦争終結後の作戦記録画をめぐる日本画壇内での軋轢や、戦争協力に関連してアメリカやフランスでも、政治的な報道や批判を受け、心に深い傷を負ったフジタにとって、納得のいく経緯であったと考えられる。

第2節 信仰と礼拝堂建設の経緯

さらに、時期は前後するが、1950年に最終的な渡仏を果たしたフジタが、なぜカトリックへ入信するにいたったのか、その心情的な発端に触れる記述も、渡仏後間もない日記の中にみつかった。

1951年9月15日¹²

私はこの先どうなるかと気が狂うばかりに心痛し、落胆して途方に暮れ仕事も手につかず……。【中略】神は救ってくれた。私は神を初めて信じて信仰することに決めた。悪夢がさめた。悪魔が退散した。【中略】基督教の宗教画を知らぬうちに書い【ママ】ていた。神を祈る女の子二人も書い【ママ】ていた。十字架も何度も書い【ママ】た。【中略】みな戦争がもたらした悲劇だ。夏以来の苦しみが終わった。私は神に感謝する。

日記の前後の記述から推察すると、①久しぶりに訪問した美術館で西洋の巨匠による絵画作品に触れたフジタが、自作と比較しつつ悩み、今後の画業を模索していた時期②アメリカやフランスでも心無い妨害や政治的世論に傷つき、フランス生活になじめない夫人の悩みも相まって、フジタ夫妻が苦しんだ時期にあたる。しかし、フランスの友人らに慰められ、仕事も軌道に乗ってきたというくだりである。このころには既に入信を考えていたことが文面から分かった。

1952年に制作された、戦後初の宗教画とされる《二人の祈り》¹³【図版1】の背景には、今まで訪問した南仏やブルターニュ地方の教会堂やカルベールが見え、十字架のような画架の上にキリストの顔のデッサンが架かっている。そして、藤田夫妻は沢山の子どもたちに囲まれて聖母子に祈りをささげているが、薄い雲の下の暗黒の闇には、世間の有象無象を示すような異形の生き物たちがうごめいている。フジタの表情にはその心情が吐露されており、夫妻がずっと手放さなかったプライベートな作品である。



【図版1】

そして、1953年夏、友人のジョルジュ・グロジャン¹⁴の別荘があるフランス南西部のピラに4度目の避暑に出かけた際、フジタは「将来、礼拝堂を作りたい。」と話し、礼拝堂の模型《NOTRE DAME DE BON SECOURS 1953》を制作した。また、グロジャンの計らいで君代夫人の希望するルルドへの参拝も実現したという¹⁵。さらに、フジタは、1956年に教会の模型をバージョンアップさせ絵画化した《教会の内部》¹⁶を描いたが、どちらの作品の祭壇にも、豪華な衣装をまとったスペイン風、もしくは南米ペルーのクスコ派の聖母像が見られる。

その後、受洗の代父であったルネ・ラルー¹⁷の全面的協力を得られることになった¹⁸

フジタは、1961年世間の雑音を避けるようにヴィリエール・バクルに引っ越し、本格的に礼拝堂建設の準備を始める。そして、1964年5月25日の日記には、「マドンナ百態発心」をし、「私のお寺（チャペル）は、マドンナ様をご本尊とする事を思いついた。」と記している¹⁹。7月には、オルレアン近郊のロマネスクの教会堂やシャルトルのノートルダム大聖堂を訪問し、9月には、アトリエの壁に水彩で聖母子の習作を描きだす。そして、1965年4月、礼拝堂の建設予定地がランスに決定する²⁰。

以上が、聖母マリアに捧げる礼拝堂を建設するに至った大まかな経緯である。

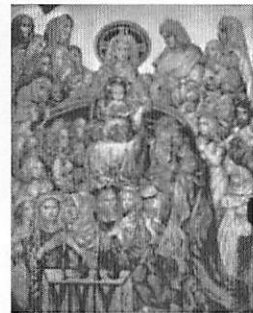
第2章 祭壇の聖母子

礼拝堂の中には、主祭壇に祈念像として描かれた《平和の聖母と子イエス》（あるいは《祝福の聖母》）と、小祭室には、ルネ・ラルーとランスに捧げた《葡萄収穫守護の聖母（葡萄の聖母）》がある。さらに、周囲の壁に描かれたキリスト伝中の《受胎告知》、《降誕》、《十字架を担う（道行）》、《磔刑》の中の聖母のほか、聖具室扉板絵にも《ご訪問》が描かれている。こちらは、キリスト伝、聖母伝に取材した物語性の強いものである。このようにたくさんの聖母が礼拝堂内に存在するが、入念な下絵デッサンが残るのは、《キリスト磔刑》と《平和の聖母子》であり、1965年4月の日記に「聖マドンナ大きくデッサンして仕上げた。」とある²¹。そして、翌年の1月にも「マドンナの顔、キリストの顔色々描いてみる。」とあり、聖母と磔刑のキリストの顔については、試行錯誤したデッサンが数多く残っている²²。

第1節 フレスコ画習作《聖母マリア》（メゾン・アトリエ・フジタ）1964-5

最初に、礼拝堂にフレスコ画を描くにあたって、アトリエの壁に水彩で描いた習作《聖母マリア》を取り上げる【図版2-1】。

この壁画は、のちに礼拝堂に描いたフレスコ画とは構図が異なる。フジタが独学で、初めてのフレスコ画の練習を開始した時に描いた習作で、当初発想していた礼拝用の祈念像だと考えられる。1964年9月の日記に、「壁のマドンナ描いてみる」とあるように、ヴィリエール・バクルのアトリエの壁に、現在も残されている。右手には、キリスト磔刑図の習作も描かれた。



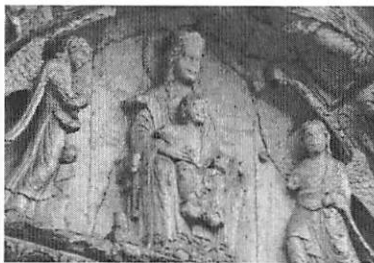
【図版2-1】

この聖母は、マリアの神性を強調する「ニコボイア型」（玉座の聖母）とよばれるタイプで、厳かに正面を向いて玉座に座り、幼子イエスを膝に置き、少し伏し目で幼子を見守っている。幼子は、左手に書物を持ち、右手で群衆に祝福をおくっている。

この習作の特徴は、聖母子を取り巻くたくさんの人物像である。「荘厳の聖母（マエスタ）」のかたちを取るが、取り巻くのは天使や聖人達ではない。聖母を取り巻く一般の信徒たちの中に、ルネサンスの巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、デューラーの姿がみられるほか、すでに油彩の宗教画の中に描いた人物や、個性的な顔貌の人物を描きこんで、フレスコ画にした時の状態を実験的に確かめているようである。

フジタは、最初に描いた習作に、なぜ「ニコボイア型」を選んだのだろうか。それは、この礼拝堂の主役である聖母には、玉座に坐す「荘厳の聖母」がふさわしいと考えていたためであろう。その参照源を探る中で、1964年7月に、フジタが田淵と共にオルレアン近郊のロマネスク壁画が残る教会堂の視察に出かけた際、80 kmも離れたシャルトルのノートルダム大聖堂も訪問していることに思い至った。シャルトル大聖堂の西正面、「王の扉口」の右手入り口のタンパンには、12世紀の聖母子像が彫られている【図版2-2】。堂内にはシャルトル・ブルーのステンドグラスの聖母子が見られ【図版2-3】、さらに、内陣とクリプタには、それぞれ黒い聖母像が祭られている。それらは、いずれも「ニコボイア型」である。他にもいたるところに聖母子の見られる聖堂である²³。

さらに、フジタの蔵書には、ロマネスクの聖母子像を集めた本があり²⁴、アルカイックな木彫の正面性の強い聖母子像と共に、12世紀のカタルニアの聖母子を祭る祭壇画【図版2-4】が掲載されている。



【図版2-2】



【図版2-3】



【図版2-4】

それらはいずれも厳粛な「ニコボイア型」であり、聖母表象の変遷を考えると、キリスト伝の真横向きの聖母子のいる三王礼拝図に次いで、聖母自身が礼拝の対象になってきたことを示しているだろう。これらの厳粛な聖母の図像をもとに、フジタは

そこに優しさを加味しつつ堂々と正面を向く聖母を描いたと考えられる。

しかしながら、礼拝堂のフレスコ画には、「ニコボイア型」は採用されなかったのである。

第2節 《葡萄収穫守護の聖母（葡萄の聖母）》（小祭室）、167×130 cm、1966. 8. 10

小祭室は、礼拝堂建設のメセナであったシャンパン会社ムムの社長ルネ・ラルーとランスに捧げられた。祭壇は、粗削りで素朴なロマネスク風である。小祭室入り口上部に描かれた、旗を背にさし血を汗のように流す《神の子羊》は、ロマネスク聖堂の祭室入り口アーチにもよく見かける意匠である。正面には、最も大きな組ステンドグラス《創世記》が掲げられ、向かって左手に、《七つの大罪》のフレスコ画、右手にこの《葡萄収穫守護の聖母》のフレスコ画が祭壇の3面を飾っている【図版3-1】。

中央の、薄物の白と青の衣装と薄茶のベールをまとった聖母は、ワイン樽の上に斜めに座しており大胆なポーズである。そして、抱いた幼子イエスに白い葡萄の房を掲げつつ、長い首を大きく傾けてイエスを穏やかに見守っている。幼子イエスはマリアの顔を見上げ、葡萄の房を取ろうと両手を伸ばしている。二人の頭上には豪華な光背が描かれている。両脇には、ブドウの収穫にいそしむ二人の乙女、左の壁には収穫を喜び踊るような姿勢の乙女、右には、礼拝に訪れた青い衣装の若い女性²⁵が描かれている。背景には、シャンパーニュ地方の広大な葡萄畑が広がり、右手奥には、サン・レミ聖堂、左奥にはランス大聖堂が遠望される。



【図版3-1】

構図は、1959年にルネ・ラルーの為に描いた油彩作品《樽に座る聖母》と酷似している【図版3-2】。さらにフジタは、1964年、葡萄を収穫する人々と葡萄畑の背景を入れた、多彩で細密な油彩画《葡萄の聖母子》も制作している【図版3-3】。フジタはこれらの作品を元にフレスコ画を描いた。

本作品はルネ・ラルーとランスへの捧げものであるだけでなく、キリスト教の教義を意識した宗教画である。葡萄と葡萄酒は、キリストの象徴として扱われ、古代から多くの宗教作品に描かれてきた。葡萄の聖母子の絵画も多い。その中でも、フラ・アンジェリコの《葡萄の聖母子》とは、聖母が葡萄の房をささげ、幼子イエス

が葡萄に手を伸ばすポーズの類似性が高い【図版3-4】²⁶。さらに、この小祭室のフレスコ画は全て上部の角を丸くした体裁で、サン・マルコ修道院の僧坊のフレスコ画を想起させ、フジタがフラ・アンジェリコを念頭に置いて制作した可能性を示している。



【図版3-2】



【図版3-3】

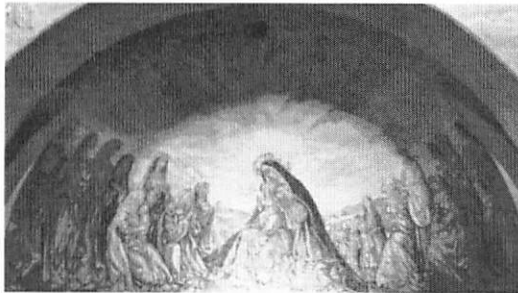


【図版3-4】

第3節 《平和の聖母と子イエス》(あるいは《祝福の聖母》) 主祭壇
フレスコ、716 cm、1966,8,12-20

礼拝堂の入り口に立つと、まず、正面の主祭壇に描かれたこの「平和の聖母子」が目飛び込んで来て、礼拝堂が聖母に捧げられたものであることを実感させられる。

【図版4-1】



【図版4-1】



【図版4-2】

斜めに坐した聖母は、うつむいて優しく幼子イエスを両手で支えている。幼子は正面を向き、右手を挙げて周囲を取り囲む人々を祝福している。背景には広々とした丘陵と遠い川と山岳が描かれ、白雲の浮かぶ空の下に聖母子を中心に据えた遠近感を感じさせるシンメトリーの構図で、レオナルド・ダ・ヴィンチの影響をうかがわせる。

ドームいっぱいに描かれた人物は、全員が女性である。様々な年齢の、寡婦、裕福

な夫人、幼児を抱いた母親、乙女、小さな子どもたちである。フジタはその中に妊婦も描きこみ²⁷、さらに左手中ほどには跪いて祈る君代夫人の姿もある。女性たちはさまざま手のポーズで静かに聖母子に祈りをささげている。うしろには、花を手にした少女たちが丘を登って集まってきている。聖母が、女性や子どもたちを守護し救済する聖人であることを思い出させる。また、玉座ではなく、地面の近くに座していることから「謙遜の聖母」のかたちであることがわかる。聖母子と女性信徒たちは、「聖母月」(5月祭)を祝っているのではないだろうかと筆者は考える²⁸。

さらに詳しく、聖母の表象【図版4-2】に注目すると、体を斜めに構え長い首をかしげて顔の四分の三をこちらに向けるポーズは、正面向きの崇高で厳粛なロマネスクの聖母とは異なる。心なしか愁いをたたえ、慈悲と慈愛、優しい母性をアピールしている。フジタは、下絵の段階では真っすぐに首を立てている聖母を描いたが、最終的に下を向き幼子イエスを慈愛に満ちたまなざしで静かに見守るかたちに決定したことが、下絵の修正から判明した。【図版4-3】

聖母の衣装は落ち着いた色調ながら、大きな薔薇とも思える花模様で、長い裳裾がうねうねと広がっている。聖母子の光背も豪華に描きこまれている。ここには、初期フランドル絵画²⁹【図版4-4】や、アンゲラン・カルトンなど、初期プロヴァンス絵画、アヴィニョン派の影響が感じられる。特にアンゲラン・カルトンの《慈悲の聖母》³⁰の色調や豪華な衣装の模様と光背は、具体的に参照した可能性が高いのではないか。

【図版4-5】

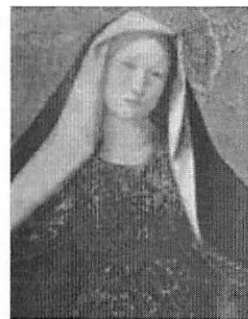
フジタは、このフレスコ画の右下に、フレスコ画の制作期間 1966 3 Juin-31Août と自分のサイン、年齢を書きこんだ。君代夫人の図像の下には Kimiyo の字も薄く見える³¹。聖母を描き終わった日は、9月15日の聖母被昇天の祭日に近く、この期日を目標において描いてきたものと考えられる。



【図版4-3】



【図版4-4】



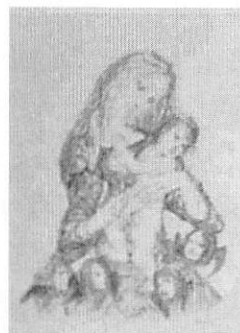
【図版4-5】

第3章 礼拝堂の聖母子表象の系譜

ここでは、フジタの聖母子表象の特徴をまとめる。

第1節 先駆けとしての母子の表象

フジタは、長年、多くの母子像を描いてきた。それは、フジタの個人的な嗜好もさることながら、その背景には、19世紀から20世紀のヨーロッパの、度重なる戦争を経験した社会状況の中で、アンティームな絵画として母子の表象が流行し、多くの画家が手掛けていたこともあるだろう。フジタの母子の画の需要はたかく、油彩だけでなくリトグラフも大量に制作され、多くが個人蔵となっている。その中には、《天使と母子》³²【図版5】のような聖母子と見間違ふ作品も多く、長らく描いてきた母子と聖母子が重なっている様子が理解できる。



【図版5】

これらの母子の表象は、異教の女神たちの多くが生命を生み出す母性礼賛の象徴となったように、キリスト教においても、聖母が教義を補完する崇敬対象として、安産、多産、母子の安寧を祈願する対象となったことと呼応しているようである。もちろん、ここに、彼の幼くして死別した母への思慕の念を見ることも可能である。

第2節 フランドル絵画など北方の中世末期絵画の影響

当初、礼拝堂内を油彩画で装飾しようと考えていたフジタは、3枚の大型の黙示録《新しいエルサレム》、《天国と地獄》、《四人の騎士》や、3枚の大型のキリスト伝《降誕》、《キリスト磔刑》、《十字架降架》だけでなく、様々なタイプの聖母、聖母子図を描いた。晩年にフジタが描いた油彩の宗教画は、色彩が豊かで量感にあふれ、一見俗な印象すら受けるといっても過言ではない。人物、特に聖母の若々しさや母性、体のボリュームを強調する衣の表現が顕著である。フジタの聖母子を主題とする宗教画は、《奇跡の聖母》【図版6】に見るように、画面の隅々まで描



【図版6】

きこみ、細密で奥行きが浅い特徴を持つ、フジタの独特な個人様式を示している。そこには、初期ルネサンス期の自然主義と遠近法を示しつつも、細部描写が隅々まで行きわたり、色彩豊かで繊細かつ装飾的なフランドルの画家たちの作風が色濃く反映していると考えられるだろう。

その後、油彩画から初めて挑戦するフレスコ画へと技法を変えた経緯については別稿で詳しく述べるが、フレスコ画は速筆を要求され、本来細部を細かく描きこむ画法には適していない。フジタも、太い毛筆を使用して大胆な筆触でフレスコ画を描いている。礼拝堂内のフレスコ壁画の聖母、聖母子の表象には、採用したフレスコ技法の影響もあり、細部をあまり描きこまない、リアル過ぎない傾向が見て取れる。油彩画に見られた、母性や母と子の情愛を前面に打ち出した生身の母子のような聖母子から、礼拝堂の本尊として、礼拝の対象としての聖母、聖母子表象へと昇華させていった様子が感じられる。

それにもかかわらず、衣装のドレーパリー、豪華な光背や小動物の描き込みなど細部にもこだわりを見せ、重ねて描写して絵具が定着せず苦勞している³³。筆者が考えるに、初めてのフレスコ画に切り替えたため、油彩画とフレスコ画双方の持ち味が混在する壁画が出来上がったのではないだろうか。全体的には大胆な筆法の描写ではあるが、聖母や天使の衣の表現、身体や小動物の描き込みは、フランドル絵画など中世末期の北方絵画様式と、元々細部へのこだわりを示すフジタの個人様式が共鳴しあったものだろう。

第3節 アヴィニオン派など、プロヴァンス絵画の影響

フジタの1950年以降の日記の中には、「プリミティブ」³⁴という言葉が散見され、賞賛の言葉として使われている。フジタは、フランドル絵画のみならず、14世紀から15世紀末までのフランスの様々な流派の絵画に関心を寄せ、多くの蔵書や資料を収集し研究していたことが、日記等も含め一次資料の調査で分かった³⁵。

さらに、1910年代後半から20年代前半にかけてと、1950年代に、アヴィニオンやヴィルヌーブ・レ・ザヴィニオン、エクス・アンプロヴァンスを訪問し、パリのルーブル美術館、クリュニー中世美術館でも、フランスのプリミティブ絵画に触れ、資料を収集していた³⁶。また、イタリアでも、フラ・アンジェリコ、ピエロ・デラ・フランチェスカ、ジョットなど、初期ルネサンスの画家たちの作品に多く触れている。

その中で、フランスに招聘され、フランスで没したシエナ派のシモーネ・マルチィ

一ニの《莊嚴の聖母（マエスタ）》³⁷の、首を斜めにかしげて座す聖母の静かな佇まい【図版7】や、アヴィニョン派のアンゲラン・カルトンに帰属する《ヴィルヌーブ・レ・ザヴィニョンのピエタ》³⁸の、マグダラの細く長い首やうつむく横顔【図版8】、細い指などは、フジタの《平和の聖母》に反映していると考えられる。さらに、前述したアンゲラン・カルトン帰属の《慈悲の聖母》の衣装や豪華な光背のみならず、パーテルミー・デックの《受胎告知》³⁹の、マリアの裾の広がる豪華な花模様のケープ【図版9】も同様に参照されたと考えられる。

アンゲラン・カルトンからの参照は、フジタの他の作品にも見ることが出来る⁴⁰。そして、これら中世末期の宗教絵画の表象には、自然主義、科学主義、人文主義にのっとった盛期ルネサンス期の表象よりも、より信仰に裏図けられた崇高な雰囲気を感じられるのだ。



【図版7】



【図版8】



【図版9】

以上のように、礼拝堂内の聖母子の図像分析と、フジタが所蔵する文献や視察した各地の聖堂や美術館の宗教絵画の分析から、フジタの聖母子表象には、初期フランドル絵画のみならず、プロヴァンス絵画などの「プリミティブ・フランセ」と称される、フランス中世末期の各流派の画家たちの影響と参照が見出されることが判明した。

おわりに

フランスにおけるフジタ研究の第一人者であるアンヌ・ル・ディベルディーは、具体的にではないが、フジタの礼拝堂の装飾には、聖書図像を再解釈したフジタ独自の発想やこだわりが顕れていると述べている⁴¹。それは礼拝堂内に描かれた順不同のキリスト伝のみならず、祭壇に祭る祈念像として描いた聖母子の在り方にも感じられた。例えば、ワイン樽に座る《葡萄収穫守護の聖母》などもその例である。更に言

えば、信者の神への執り成しや祈願を受けとめる荘厳さをたたえた正面向きの聖母とは異なる、祈るものの心を癒す慈愛に満ちた聖母の姿を重視した点である。

フジタは、1966年8月30日にすべてのフレスコ画を完成させ、ランスという立地と時代の要請の元、「平和の聖母礼拝堂」と命名された「フジタ・チャペル」は、10月1日、成聖式（祝福式）を迎えた。10月18日には盛大な落成式が行われ、その後ランス市に寄贈された。フランス内外の新聞、雑誌、TVの取材を受け、ランス市内のみならずフランス国内、海外、日本からも多くの見学者を迎えた。フジタの言葉を引用すれば「最後の大事な」を成し遂げ、自らの贖罪と、聖母への礼拝堂の奉獻という大望を果たし安らぎに満たされて、フジタは、ヴィリエール・バクルのアトリエに戻った。そして、すぐに打診のあった依頼、アメリカ、ダラスのケネディー礼拝堂の装飾は即座に断っている。3か月間の過酷な作業によってフジタの体調は急速に悪化し、その年の暮れには入院を余儀なくされた⁴⁾。

フジタは、礼拝堂の祭壇の装飾に、得意の油彩で壁画を描くこともできたであろうが、あえて初めての挑戦となる、技法的にも制約の多いフレスコ画を選んだ。画家としてまだ身に付けていないフレスコ画の技法を体得しようという旺盛な意欲もあっただろう。同時に、長らく西欧の宗教画を研究する中で、具象画家として、盛期ルネサンスの巨匠たちの自然主義や幾何学的遠近法などによる合理的な美の追求に殉ずるだけでなく、それ以前の中世の画家、画工たちが描く、宗教的な祈りに裏付けられた美に魅かれるものがあったからではないだろうか。

参考文献・資料

〈一次資料〉

「藤田嗣治資料」東京藝術大学大学美術館収蔵

「藤田嗣治旧蔵書」東京国立近代美術館本館アートライブラリ収蔵参考文献・資料

Foujita | |B2y| | 3 : Sylvie Buisson et Dominique Buisson, *La vie et l'œuvre de Léonard-Tsuguharu Foujita*, Paris, 1987.

Foujita | |B4y| | 43 : Grete Rin, *La peinture française du quinzième siècle*, London, 1949.

Foujita | |B4y| | 110 : Michel Laclotte, *L'école d'Avignon : la peinture en Provence aux XIV^e et XV^e siècles*, Paris, c1960.

Foujita | |B4y| | 113 : *Vierges romanes : Les Vierges assises 2e éd (Les Points cardinaux:4)*, La Pierre-qui-vire Yonne, 1961.

Foujita | | B4y | | 126 : José Gudiol, Geneviève Souchal, Enzo Carl, *La peinture gothique*, Paris, 1964.

Foujita | | B4y | | 182 : André Blum, *Les primitifs de la gravure sur bois : étude historique et catalogue des incunables xylographiques du Musée du Louvre*, Paris, 1956.

〈その他の文献〉

Henri Bouchot, Léopold Delisle et Jules Guiffrey, *Exposition des Primitifs français au Palais du Louvre (Pavillon de Marsan) et à la Bibliothèque nationale: catalogue*, Paris, 1904.

<https://bibliotheque-numerique.inha.fr/viewer/5338/?offset#page=1&viewer=picture&o=bookmark&n=0&q=>

Dominique Thiébaut, Philippe Lorentz, François-René Martin, *Primitifs français. Découvertes et redécouvertes* (catalogue de l'exposition), musée du Louvre, 27 février-17 mai 2004. Paris, 2004.

泉美知子『文化遺産としての中世 近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存』三元社、2013年。

上田重雄『聖母マリア』岩波新書、1987年。

岡田温司『処女懐胎 描かれた「奇跡」と「聖家族」』中央新書、2007年。

J.=K.ユイスマンス『大聖堂 神秘と宗敝の聖堂賛歌』出口裕弘訳 平凡社、1995年。

『新約聖書』フランシスコ会聖書研究所訳註 サンパウロ、2012年。

竹下節子『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』講談社、1998年。

林洋子「藤田嗣治からレオナルド・フジタへ」特集「近代の宗教美術」『近代画説』第24号、2015年。

ビエール・ラドエ「仏教からカトリシズムへレオナルド・藤田」『世紀』3月号、1963年。

『フジタ寄贈品』『作品のカタログ』Musée des Beaux-Arts de Reims、2018年。

『FOUJITA MONUMENTAL! ENFER ET PARADIS フジタ・モニュメンタル! 地獄と天国』ランス市美術館、2010年。

西野嘉章『十五世紀プロヴァンス絵画研究—祭壇画の図像プログラムをめぐる一試論—』岩波書店、1993年。

『没後40年レオナルド・フジタ展図録』北海道近代美術館、2008年。

宮下規久朗『聖母の美術全史—信仰を育んだイメージ』ちくま新書、2021年。

吉岡泰子「レオナルド・フジタの古寺巡礼ー「平和の聖母礼拝堂」に至る道・フランス西部を中心にー」『文明研究』第39号 東海大学文明学会、2020年。

湯原かの子『藤田嗣治 パリからの恋文』新潮社、2006年。

図版リスト・出展

- 【図版 1】 藤田嗣治《二人の祈り》、1952、油彩・カンバス、46.2×38.2 cm、名古屋市美術館。[カタログ「没後 50 年藤田嗣治展」2018 年]
- 【図版 2-1】 レオナルド・フジタ、《聖母マリア》習作、1964-5、水彩、メゾン・アトリエ・フジタ。[メゾン・アトリエ・フジタ提供]
- 【図版 2-2】 聖母子像、浅浮き彫り、12 世紀、シャルトル大聖堂・西扉。
[<http://izmreise.la.cocacn.jp/France/Gothic/Chartres/chartres04.h> (2021.12.26 参照)]
- 【図版 2-3】 シャルトルの聖母、ステンドグラス、12 世紀、シャルトル大聖堂・南側廊。
[<http://izmreise.la.cocacn.jp/France/Gothic/Chartres/chartres07.htm> (2012.12.26 参照)]
- 【図版 2-4】 サンタ・マルガリーダ・デ・ピラセカの祭壇正面《Frontal de Santa Margarida de Vilaseca》、12 世紀、テンペラ・板、95.8×147.5×5 cm、Museu Episcopal de Vic。[Fujita | |B4y | |113 : *Vierges romanes : les Vierges assises 2e éd* (Les Points cardinaux:4), La Pierre-qui-vire, 1961.]
- 【図版 3-1】 レオナルド・フジタ《葡萄収穫守護の聖母》、1966.8.10、フレスコ、167×130 cm、ランス、平和の聖母礼拝堂（小祭室）。[ランス市美術館提供]
- 【図版 3-2】 レオナルド・フジタ《樽に坐した聖母》、1959、油彩・カンバス、個人蔵。
[Fujita | |B2y | |3 : Sylvie Buisson et Dominique Buisson, *La vie et l'œuvre de Léonard-Tsuguharu Foujita (La vie et l'œuvre)*, Paris, 1987.]
- 【図版 3-3】 レオナルド・フジタ《葡萄の聖母》1964.6、油彩・カンバス、65×54.7 cm、個人蔵。[Fujita | |B2y | |3 : Sylvie Buisson et Dominique Buisson, *La vie et l'œuvre de Léonard-Tsuguharu Foujita (La vie et l'œuvre)*, Paris, 1987.]
- 【図版 3-4】 フラ・アンジェリコ《葡萄を持つ聖母子 Madonna and Child of the Grapes》、1425、テンペラ・板、102 ×59 cm。[Barbara Piasecka-Johnson Collection Princeton, NJ US] [<https://www.wikiart.org/en/fra-angelico/madonna-and-child-of-the-grapes> (2012.12.26 参照)]
- 【図版 4-1,2】 レオナルド・フジタ《平和の聖母子》、1966.8,12-20、フレスコ、716 cm、ランス、平和の聖母礼拝堂（主祭室）。[ランス市美術館提供]
- 【図版 4-3】 レオナルド・フジタ《平和の聖母子》下絵、紙・チョーク、ランス市美術館。
[『フジタ寄贈品』『作品のカタログ』Musée des Beaux-Arts de Reims, 2018.]
- 【図版 4-4】 フランクフルトの画家《風景を背景に、低い壁に座る聖母子 La Vierge à l'Enfant assise sur un muret, sur fond de paysage》、1475-1525、油彩・板、0,77 × 0,46m、Musée du Louvre, Pays-Bas du Sud École。
[<https://collections.louvre.fr/ark:/53355/cl010066068> (2021.12.26 参照)]
- 【図版 4-5】 アンゲラン・カルトン《慈悲の聖母・カダール祭壇画 La vierge de miséricorde de la famille Cadard》、1452、0.66×1.87m、シャンティイ コンデ美術館。
[<https://meigalouvre.amebaownd.com/posts/7905072> (2012.12.26 参照)]
- 【図版 5】 レオナルド・フジタ《天使と母子》、1964、リトグラフ、54.0×40.cm、君代コレクション、個人蔵。
[<http://www.ne.jp/asahi/gallery/koyama/nihon/fujita/no81.h> (2021.12.26 参照)]
- 【図版 6】 レオナルド・フジタ《奇跡の聖母》、1964.6.6、油彩・カンバス、65.3×54.1 cm、ランス市美術館。[カタログ『ランス美術館展』、2016]
- 【図版 7】 シモーネ・マルチーニ《莊嚴の聖母（マエスタ）》部分、1315、板・テンペラ、

- 66×187 cm, Palazzo Pubblico, Siena.[<https://www.musey.net/7415> (2021.12.26)]
- 【図版 8】 アンゲラン・カルトン《ヴィルヌーブ・レ・ザヴィニヨンのピエタ、Pietà de Villeneuve-lès-Avignon》、1450 - 1475、油彩、1,63×2,185m、ルーブル美術館。
[<https://collections.louvre.fr/en/ark:/53355/cl010063345> (2021.12.26 参照)]
- 【図版 9】 パーテルミー・デック Barthélemy d'Eyck : エクスの画家《受胎告知、The Annunciation》、1442-1445、155 x 176 cm、Église de Sainte Marie-Madeleine, Aix-en-Provence.[<https://www.wga.hu/support/viewer/z.html>(2022.2.8 参照)]

註

- 1 アンヌ・ル・ディベルティ（平和の聖母礼拝堂建築研究会）「キリスト教徒フジタとシャベル・ノートル＝ダム・ド・ラ・ペ」『没後 40 年レオナル・フジタ展図録』北海道近代美術館、2008 年、188 頁—203 頁。
- 2 林洋子「藤田嗣治からレオナル・フジタへ—カトリックのへ道行き」特集「近代の宗教美術」『近代画説』第 24 号、2015 年、81-82 頁。
- 3 ビエール・ラドエ「仏教からカトリシズムへ—レオナル・藤田—」『世紀』3 月号、1963 年、76 頁。
- 4 アンヌ・ル・ディベルティ、前掲論文、188 頁。
- 5 431 年、東ローマ皇帝テオドシウス 2 世が小アジアのエフェソスに召集した公会議で、マリアを神の母と定めた。
- 6 宮下規久朗『聖母の美術全史—信仰を育んだイメージ』ちくま新書、2021 年、72 頁。
- 7 1933 年、フジタは南米チリを訪問し、クスコ派の聖母子や聖人の宗教画を購入している。そのうち数点が秋田の平野政吉コレクションに入り、現在は、秋田県立美術館蔵。また、フジタは、スペイン、イタリア、オランダ、ベルギー等の各地の聖堂、美術館を訪れ、メゾン・アトリエ・フジタには骨董コレクションの一つとも考えられる、スペイン風の聖母と幼子の頭部や古い木彫聖母像などが祭られ、各地の聖母崇敬の様相に興味を持っていた様子が分かる。
- 8 吉岡泰子「レオナル・フジタの古寺巡礼—「平和の聖母礼拝堂」に至る道・フランス西部を中心に—」『文明研究』第 39 号 東海大学文明学会、2020 年、125-155 頁。
- 9 藤田資料 (FT00541, 00542) : 以下同様。東海大学文明学会、2020 年、125-155 頁。
- 10 フジタの礼拝堂建設に協力した画家、田淵安一 (1921-2009) は、1951 年にパリに留学し、ソルボンヌ大学美術考古学研究所に籍を置いた。渡仏後 1、2 年はフランス内外を見学し、1952 年～1953 年には日本人の画家仲間と共に、ロマネスク聖堂を多数巡っている。その後、ヨーロッパや日本で活躍する抽象表現主義の画家として活躍する一方、世界各地を探訪し西欧文明の原点を探り、著作も多い学者肌の人物であった。
- 11 湯原かの子『藤田嗣治 パリからの恋文』新潮社、2006 年、267 頁。
- 12 藤田資料 FT00577。
- 13 《二人の祈り》1952 年、油彩、カンバス、46.2×38.2 cm、名古屋市美術館蔵。この作品には、フジタや子どもたちが乗る薄い雲やその下の闇など、アンゲラン・カルトン (1410/15 頃—1466) の《聖母戴冠》、ルーブル美術館蔵からの参照が色濃く、藤田資料 FT4466 には《聖母戴冠》の部分拡大写真が複数残されている。
- 14 ジョルジュ・グロジャン (Georges Grosjean 生没年不詳) フランス人ジャーナリスト。終戦後日本でフジタと知り合い、フランスに帰還後もフジタを支援した。:カタログ『没後 40 年レオナル・フジタ展』北海道立近代美術館、2008 年、189-190 頁
- 15 ジョルジュ・グロジャンの証言: カタログ『没後 40 年レオナル・フジタ展』192 頁。ルルドは、1858 年にフランスのルルドに出現した聖母マリアを祭り、ルルドの泉には病氣治癒の力があるとされる。現在も多くの巡礼者が訪問する。

- 16 《教会の内部》1956年、47.0×38.5 cm、布・油彩、ランス市美術館蔵。
- 17 ルネ・ラルー (René Lalou) は、礼拝堂建設地ランスのシャンパン会社社長。フジタとは1956年のポール・ペトリデスでの個展で知り合い、その後、洗礼の代父となり「平和の聖母礼拝堂」建設を全面的に支援した。
- 18 藤田資料 FT00555 1961年1月24日の手記「チャペルの夢」。
- 19 藤田資料 FT00561。
- 20 藤田資料 FT00564 1965.4.14の日記に、シャペルランスに決定の日の記載。欄外に、チャペルの絵と Reims に調和するフランス風に変更 壁画+皆 改めて考え直すとのある。
- 21 藤田資料 FT00564 1965.4.20。
- 22 カタログ「フジタ寄贈品」「作品のカタログ」Musée des Beaux-Arts de Reims、2018年。
- 23 J.=K.ユイスマンズ『大聖堂 神秘と宗廟の聖堂賛歌』出口裕弘訳、平凡社は、シャルトル大聖堂に関する記述が詳しい。
- 24 Foujita | | B4y | | 113 : *Vierges romanes : les Vierges assise* 2e éd (Les Points cardinaux : 4), La Pierre-qui-vire], Zodiaque, 1961.
- 25 フジタの洗礼時の代母テタンジェ夫人 (シャンパン会社関係者の夫人) と考えることも、その風貌から可能なのではないか。
- 26 *Madonna and Child of the Grapes*, Fra Angelico, Date: c.1425, Style: Early Renaissance, Media: panel, tempera, Dimensions: 102 × 59 cm.
- 27 フジタの守護聖人、聖レオンハルトは妊婦や病人の守護聖人でもある。それもあつてか、フジタはわざわざ日記に、妊婦も描き加えたと記している。
- 28 「聖母月」5月に、聖母マリアをたたえ、マリア行列などの行事を行う。モーリス・ドニは《聖母月》1907年を描いた。ドニの弟子であり、フジタの知古でもあるカトリックの信仰を持つ小柴錦侍は、聖母月の画《美しい五月、マリアの月》(帝国美術院第2回出品)を描いている。フジタもこの行事を十分知っていただろう。
- 29 *La Vierge à l'Enfant assise sur un muret, sur fond de paysage*, Fin du XVe siècle - début du XVIe siècle (1475 - 1525), Maître de Francfort, Attribué à Pays-Bas du Sud, École de.
- 30 アンゲラン・カルトン&ピエール・ヴィラト《カダール祭壇画・慈悲の聖母》、1452年、シャンティイ、コンデ美術館、0.66×1.87m。
- 31 職人も来ない夏の休暇中は、君代夫人の手伝いだけでフレスコ画を描き続けた。しかし、君代夫人は、礼拝堂はフジタとルネ・ラルーだけのものと悲観し、8月30日に自分の名前を自ら消してしまった。
- 32 レオナルド・フジタ、《天使と母子像》、リトグラフ、54.0×40.0 cm、1964年は、1959年制作の《聖母子》、油彩・キャンバス、81.5×54.2 cm、1959.10.14の、ランス大聖堂蔵(ランス市美術館寄託)と酷似。他にも聖母子、母子のデッサンが多数残されているが、母子の場合は幼子イエスの代わりに、幼女のものが多い。その題名やニンブスの有無などで区別がやっとなつく場合も多々ある。
- 33 最終的にフィキサチーフも使用した。
- 34 ここでの「プリミティブ」は、ルネサンスに先立つ中世末期のヨーロッパ各地の諸流派の画家やその作品の様式を言う。
- 35 1904年4月から7月まで開催された「プリミティブ・フランセ」展(初期フランス美術展)のカタログ。Henri Bouchot, Léopold Delisle et Jules Guiffrey, *Exposition des Primitifs français au Palais du Louvre (Pavillon de Marsan) et à la Bibliothèque nationale : catalogue*, Paris, 1904. この中に掲載されている作品が多数掲載されている書籍をフジタは1950年から購入し、研究、さらに自分の作品にも参照していたと考えられる。
- 藤田嗣治旧蔵書 : Foujita | | B4y | | 43 Grete Rin, *La peinture française du quinzième siècle*, London, 1949. Foujita | | B4y | | 110 Michel Laclotte, *L'école d'Avignon : la peinture en provenance aux XIVe et XVe siècles*, Editions d'art Gonthier-Seghers, Paris, c1960. Foujita | | B4y | | 126 Jose Gudiol, Geneviève Souchal, Enzo Carli *La peinture gothique*, Editions du Pont Royal, Paris, 1964. Foujita | | B4y | | 182 *Les primitifs de la gravure sur bois : étude historique et catalogue des incunables xylographiques*, Musée du Louvre, Paris, 1956.

³⁶ 藤田嗣治資料には、パリのルーブル美術館、クリュニー中世美術館などに所蔵されるゴシック期の絵画作品の絵葉書、部分拡大資料が多数含まれている。

³⁷ *Maesta del Palazzo Pubblico di Siena*, 1315, SIMONE MARTINI (1280/85, Siena, d. 1344, Avignon), Palazzo Pubblico, Siena.

³⁸ *Pietà de Villeneuve-lès-Avignon*, Date de création/fabrication : 3e quart du XVe siècle (1450 - 1475), Quarton, Enguerrand, Attribué à France Provence, École de.

³⁹ *Barthélemy d'Eyck* : エクスの画家, *The Annunciation*, 1442-1445, 155 x 176 cm, Église de Sainte Marie-Madeleine.

⁴⁰ 《キリスト降架》にもその影響は顕れているが、それについては別稿で触れる。また、註 14 の《二人の祈り》を参照。

⁴¹ アンヌ・ル・ディベルディー「序論として」カタログ「*FOUJITA MONUMENTAL! ENFER ET PARADIS* フジタ・モニュメンタル！地獄と天国」、ランス市美術館、2010年、182-183頁。

⁴² 藤田資料 FT00565 12月8日。

【別添資料；年表】次ページより。

【別添資料1】 略年表 「平和の聖母礼拝堂」に至る道 関連年表

年代	世界史	フジタの動向	画業と作品	宗教画	礼拝堂建設	その他の関連事項
1886		東京に生まれる				山下りん、イコン制作
1910		東京美術学校卒業				1911、小柴錦侍、アカデミー・ランソン、ルーブル美術館入学
1913		第1回目渡仏				
1914	第一次世界大戦勃発					
1918	終戦	南仏、ブルターニュ			ブルターニュのカルペールに感銘を受ける	
1919	ヴェルサイユ条約締結	地方訪問。ゼーホルツアと知り合う。ベネディクトス15世、ピウス11世に謁見。	1922 サロン・ドートンヌ入賞。	《礼拝》等宗教テーマの作品《聖誕 於巴里》《聖誕》《キリスト磔刑》《キリスト降架》		
1925		ローマ訪問。一時帰国	乳白色の裸婦描き、エコール・ド・パリの寵児となる。	1927 《三連祭壇画》		1925 長谷川路可、アール・デコ博日本館参与。ピウス11世に拝謁
1930	世界大恐慌					
1931	満州事変	南米に向かい、メキシコ、アメリカを経て、1934 日本帰国				
1934			映画『現代日本』			1934 カタルーニャ美術館開館。ピカソ賞賛
1935		東北、沖縄、中国視察	大画面・壁画描く 《秋田の行事》			吉川逸治サン・サヴァン修道院聖堂壁画研究開始
1937						
1939	第二次世界大戦勃発	再渡仏するも、1940				
1940		パリ脱出	戦争画多く描く 《アッツ島玉砕》《サイパン島同胞臣節を全うす》			
1945	終戦 東西冷戦	戦犯問題解決				

レオナルド・フジタ「平和の聖母礼拝堂」と中世美術

1949		アメリカに出国	《カフェ》			
1950	朝鮮戦争勃発	フランス入国	《ラ・フォンテーヌ頌》			長谷川路可、チビタヴェッキオの日本聖殉教者教会に祭壇画制作(1950—)
1951	サンフランシスコ講和条約調印	南仏、スペイン、アルジェリア、ミラノ等訪問	《姉妹》	1952 《二人の祈り》	1953 礼拝堂の模型製作 聖堂を建てたいとグロシヤンに言う。聖地ルルド訪問。	1951 マティス、ロザリオ礼拝堂建設 1952 田淵安一、金山康喜ら渡仏柳宗玄（・55）、野見山暁治渡仏・
1952			子ども、母子、市井の人々多く描く。			
1953			レーヴァークゼン「パリの日本人画家たち展」			
1954	インドシナ4か国独立・アルジェリア戦争勃発		「時代の証人の画家たち展」《ジャン・ロスタンの肖像》	1956 《教会の内部》	ルネ・ラルーと知り合う。サン・サヴァン等のロマネスク聖堂訪問	1952 田淵安一、金山康喜ら渡仏柳宗玄（・55）、野見山暁治渡仏・ 1955 ル・コルビジエ、ロンシャン礼拝堂再建
1955		フランス国籍取得		宗教画研究盛んに行う。		
1956						
1957		1957 レジオン・ドヌール勲章（オフィシエ）受章				
1958	ドゴール第五共和政	1958 ベルギー王立アカデミー会員 ランス大聖堂で受洗し、レオナルド・フジタとなる。	1958 「小さな職人たち」	《樽に坐せる聖母》 《聖母子》 《黄金の聖書》 《黙示録三連作》 《キリスト降架》 《キリスト降誕》 《磔刑》		
1959		ローマ法王ヨハネ23世に謁見。 イタリア訪問。	ポール・ペトリデス画廊の個展：宗教画			1959 ジャン・コクトー、サン＝ブレーズ・デ・サンブル礼拝堂装飾
1960			《フランスの富》		ルネ・ラルーの支援が得られることになる。	1960 ル・コルビジエ、ラトゥーレット修道院再建

1961				第一回トリエステ国際宗教美術展金賞	1961.1 『チャペルの夢』	
1962	アルジェリア独立	パリ郊外ヴィリエ・ル・バクル転居		1962 《礼拝》	書く。	
1963	部分的核実験禁止条約			1963 《マドンナ》	用地探し	1963 堂本印象《栄光の聖母マリア》カトリック玉造教会
1964	東京オリンピック		ポール・ベトリデス 画廊最後の個展	3月「マドンナ百態発心」1964《葡萄の聖母子》1964《奇跡の聖母》1964《授乳の聖母》1964《聖母マリア》フレスコ習作 1965《キリスト磔刑》フレスコ習作 最終マケット制作 ステンドグラス 板絵、礼拝堂内フレスコ画作成	7月、田淵とオルレアン近郊のロマネスク聖堂視察 秋以降、壁画、フレスコの準備始める。	
1965	ベトナム戦争勃発	マティスのロザリオ 礼拝堂訪問 コクトーの礼拝堂再訪問			4月、礼拝堂用地、ランスに決定。	夏堀全弘『藤田嗣治芸術試論』中、藤田嗣治直話の執筆
1966					礼拝堂設計、ステンドグラス制作。デッサン	1966 田淵、柳宗玄の「中世キリスト教遺跡調査」に協力（トルコ、カッパドキア）
1967					3月礼拝堂着工。	1967 平野政吉美術館開館（秋田県立美術館）
1968	パリ5月革命	ほぼ通年闘病生活 永眠（81）			6月フレスコ壁画制作開始、3か月で完成。 10月「平和の聖母礼拝堂」、祝福式、落成式。 ランス市に寄贈	

* 藤田嗣治資料（日記）の他に参考にした図書、資料

味岡京子『聖なる芸術二十世紀前半フランスにおける宗教芸術運動と女性芸術家』2018年 ブリュック

『フジター色彩への旅』2021年 ポーラ美術館 求龍堂 他